

場所：世田谷区三茶しゃれなあと

選者 川口孤舟

投句・選句 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 熊谷くにお 後藤とみ子 小早健介
 在間千恵 佐藤ただしげ 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫
 西澤國護 長谷見びん 福島正明 古田昇 古川百合子 星田啓子 宮内規雄
 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄
 選句のみ 伊賀山そらお、梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章
 山本三恵

【互選句】 ◎は孤舟選者の選 選者欄の○は選者の「天」

十点

懼もなく臆もなく渡る月の舟 孤舟(紀・○健・孝・○龍・ゆ・允・規・け・○三・盛)
 かなかなやありやあらずや黄泉の国 百合子(そ・紀・くす・五・健・と・○孝・己・規・三)

八点

寂一字処暑の風立つ山の墓 五郎太 (○そ・紀・く・健・清・○康・び・○啓)
 ◎本屋から読書の秋を連れて来る 天牛 (紀・○くす・孤・健・と・千・堂・啓)

六点

◎我が影を踏み踏み帰る月明かり 忠彦 (孤・く・た・孝・國・雅)
 一湾の鏡風して月今宵 孤舟 (くす・五・清・己・○堂・允)
 トネルの先もトンネル秋の旅 五郎太 (紀・堂・國・昇・け・天)
 秋風や施設の母また弱りゆく 正己 (紀・忠・隆・び・百・規)
 殉教の墓に寄り添ふ曼珠沙華 昇 (そ・く・千・た・雅・正)
 黒揚羽前世は隠れ吉利支丹 正明 (紀・くす・千・清・昇・亜)
 思い出は笑い声かな盆の月 けい子 (紀・と・己・國・雅・百)
 ◎関取の深き一礼秋うらら 盛雄 (紀・孤・五・啓・け・天)

五点

新蕎麦や老いを楽しむ酒の会 忠彦 (紀・た・ゆ・○允・○正)
 通院のペダル重たき残暑かな 健介 (紀・た・○己・び・盛)
 爽やかやチェロ四重奏聴く夕べ とみ子 (紀・隆・び・正・昇)
 島々に朝日輝く瀬戸の秋 ただしげ (そ・紀・忠・ゆ・雅)
 ◎屈み見る去来の墓に赤とんぼ 康敏 (紀・孤・び・昇・天)

四点

山形の蔵王山麓蕎麦の花 忠彦 (紀・允・正・天)
 邯鄲の夜半の風落つ古戦場 くに お (そ・紀・康・○昇)
 秋天に音なき音や伎楽俑 とみ子 (くす・清・康・亜)

執着を抱きしめ放つ秋空へ
竜胆の揺るるほどにや色の濃く
颱風来明日リモートとメールする

百合子 (と・清)
啓子 (紀・三)
亜也 (紀・啓)

一点

マドンナも遂に陥落秋の巴里
林檎手にガブリと出来た若き時
桐一葉乱高下する株価かな
光る君の知るを楽しむ夕月夜
紫に光る秋茄子酒よろし
見上げれば西の空へと罫雲
涼新た妻の御浚いシヨパンかな
赤蜻蛉見渡す樹間透き通り
秋夕焼あまたの瀬音出湯かな
曼珠沙華咲いて青空移りゆき
森ゆれて暑さ続くを歌いおり
秋夕焼け富士に濃淡ありにけり
亀虫の窓枠這うや浅間暮る
宇治金時自律神経目覚めさせ
相聞歌奏づることく虫の声

紀久男 (盛)
忠彦 (紀)
くにお (ゆ)
千恵 (紀)
全 (國)
ただしげ (び)
堂哉 (正)
ゆたか (三)
全 (紀)
全 (國)
雅夫 (け)
國護 (紀)
びん (くす)
正明 (堂)
昇 (百)

【句評・短評】

十点

懼もなく臆もなく渡る月の舟

孤舟

健介さん・・・発想、表現いずれも秀逸、脱帽です
龍平さん・・・お月様は正に天空のエンターテイナー
くれます。

舟になり兔の遊ぶ野になり数多の夢を提供して

ゆたかさん・・・天空を渡る月の様子を臆もなく、懼もなく渡ると見立てたところが見事です。
三恵さん・・・宇宙空間という波間に見え隠れしては漂っている。地上から眺めると大変メルヘンチックな光景です。しかしながら、実は、はつきりとした道標もなく、頼もしい「漕ぎ手」もない今の混沌とした世界情勢でないかとふと薄ら寒さを感じてしまいました。

盛雄さん・・・今回の出句、「広め屋・・・」同様に今回の秀句。十七文字に無駄が無い。

かなかなやありやあらずや黄泉の国 百合子

五郎太さん・・・いつのまにか爽やかな季節に。生を終えしものには心休まるところがきつとあるでしょう。

孝岳さん・・・秋を知らせる蟬の声は黄泉の国の存在を知らせるかのように寂寥として物悲しい。

八点

寂一字処暑の風立つ山の墓

五郎太

くにおさん・・・「寂一字」の墓といえば文豪谷崎潤一郎の墓。京都のあの鹿ヶ谷の法然院にある。

寂一字と墓が上五と下五で離れ過ぎていないだろうか。

康敏さん・・・「寂」の一字を刻した墓石。京都鹿ヶ谷の法然院にある谷崎潤一郎夫妻の墓だ。下界は猛暑だが、ここに吹く風には処暑が感じられる。

◎本屋から読書の秋を連れて来る

天牛

孤舟選者・・・「書店から本を買ってきた」事実を極めて詩的に表現。

とみ子さん・・・本を買ったというところを、読書の秋を連れて来ると表現されたのが良かったです。千恵さん・・・本屋に行つて本を手に入れるのが「読書の秋」の醍醐味です。

堂哉さん・・・本屋で買うことはめつきり減つたこの頃ですが、新刊書を手にしたときの喜びが伝わつて来ました。

啓子さん・・・昨今はネットで取り寄せる事の多い本。本屋さんでじっくり選んで手にした本は殊の外心を満たしてくれるようです。選ぶ楽しさをそのままに「読書の秋を連れて来る」。軽い興奮も感じられます。

六点

◎我が影を踏み踏み帰る月明かり

忠彦

孤舟選者・・・月明の夜道を進めば、月が追い掛けてくるようだ。

ただしげさん・子供の頃に帰つたようで懐かしい

一湾の鏡風して月今宵

孤舟

五郎太さん・・・少し古風ながらも巧みな表現に感心しました。

堂哉さん・・・綺麗な景色が目に浮かびます。海面の月の道が綺麗ですね！

トンネルの先もトンネル秋の旅

五郎太

堂哉さん・・・山陽新幹線は正にこれです！

天牛さん・・・山陰線に、トンネルだらけで煤だらけになるところがありました。いずれの旅でしょうか。

※康敏さん・・・季語が動くのでは：「初夏の旅」「春の旅」とか。

参考・・・トンネルを抜けてトンネル冬の山 名島恵子

秋風や施設の母また弱りゆく

正己

隆さん・・・秋は春から夏の勢いが落ちるときでもある。乗り切る大切さは冬に劣らない。

百合子さん・子だからこそ肌で感じる親の変化、受け止める気持と受け止めたくない気持ちが交々に。

殉教の墓に寄り添ふ曼珠沙華

昇

くにおさん・・・「寄り添ふ」とまで言う必要はないような気がする。

千恵さん・・・この花はあちらの世界を思わせる花なので殉教者にはお似合いです。寄り添ふが良いですね。

ただしげさん・殉教の墓の傍らに咲く彼岸花、此の情景が美しい

黒揚羽前世は隠れ吉利支丹

正明

亜也さん・・・伝奇小説めいたところは好みですが、夏の季語なのは許容範囲？

思い出は笑い声かな盆の月

けい子

とみ子さん・・・盆の月を明るくおさめられたのが、良かったです。

百合子さん・・・家族が集まって談笑していたあの頃、ちよっぴり切ない思い出ですね。

◎関取の深き一礼秋うつら

盛雄

孤舟選者・・・日本の国技・相撲は礼に始まり礼に終わる。最近これを守れない大関が居た。

五郎太さん・・・気持ちいい作法です。

天牛さん・・・今どきのお相撲さんは皆行儀がいいし、りっぱな青年ですね。大の里しかり!!

五点

新蕎麦や老いを楽しむ酒の会

忠彦

ただしげさん・新蕎麦の季節、老いを楽しむのか、酒を楽しむのか・・・？
ゆたかさん・・・いい雰囲気が見事に表現されています。

允章さん・・・蕎麦美味し酒美味し、幸せです。

正明さん・・・米寿を控え酒が飲めない日々です。酒が飲める人が羨ましいです

通院のペダル重たき残暑かな

健介

ただしげさん・残暑厳しい中での自転車での通院、ペダルより心の重たさが感じられる
盛雄さん・・・未だに残暑は終わらない。厳しい夏でした。

爽やかやチェロ四重奏聴く夕べ

とみ子

隆さん・・・バイオリンと似た形のチェロだが音は低く、もの思う秋に相応しい。

びんさん・・・きれいですね！ 私も一つ。 ●暮れゆけばチェロの音漏るる鳶の窓

島々に朝日輝く瀬戸の秋

ただしげ

ゆたかさん・・・素晴らしい景色が目には浮かびます

◎屈み見る去来の墓に赤とんぼ

康敏

孤舟選者・・・京都・嵯峨野の落柿舎の去来のお墓。赤とんぼまでがお彼岸の墓参りに来ている。

天牛さん・・・秋になって赤とんぼもお墓参りに来たんでしょうか。

四点

山形の蔵王山麓蕎麦の花

忠彦

天牛さん・・・ほかに農作物が出来ない土地に、満開にそばの花が一面に咲いているのでしょうか。

邯鄲の夜半の風落つ古戦場

くにお

康敏さん・・・夜半の古戦場。風が凪いで邯鄲の音が一段と高く聞こえる。上五を「邯鄲や」としては。

昇さん・・・邯鄲の風に震えるような鳴き声からは古戦場の物哀しい風景を連想します。

秋天に音なき音や伎楽備

とみ子

康敏さん・・・隋代の古墳より出土したガールズバンドの伎楽備。賑やかな楽の音が秋空に吸い込まれて行く。

亜也さん・・・複数が一緒に展示されるのが通例なので、余計音楽を感じさせます。

新涼や掌にたつぷりと化粧水

とみ子

康敏さん・・・涼しくなると、皮膚が乾燥する。化粧水をたつぷりと。生活のワン・シーンの句は新鮮だ。

隆さん・・・新涼は女性にも気持ちの切り替え時か。

運動会家族で囲む重ね

國護

ただしげさん・懐かしい風景を上手く詠んでいる。昔の運動会はこのように家族みんなで昼食を囲んだものです。

堂哉さん・・・懐かしい！

曳舟の機関音消ゆ霧のなか

びん

亜也さん・・・この情景には惹かれるものの、以前に類句があったような…。

万象に炎暑のにじむ山河かな

びん

康敏さん・・・史上最高の猛暑日が続き万象が悉く喘いだ夏だった。

森を知る老いの歩みや晩夏光

びん

龍平さん・・・「バリ山行」という小説が「二回芥川賞に輝きました(文藝春秋6月号掲載)関西六甲山

脈周辺が舞台になっています。山行愛好の方は是非どうぞ。

ゆたかさん・・・いつも森の中を散策されておられる様子が目に浮かびます。

赤トンボ津波の痕を調査中

正明

隆さん・・・確かに赤トンボにとっても津波である。

啓子さん・・・東日本大震災後の秋。被災した海辺の叢には赤とんぼが飛んでいた。そうか、津波の痕を調査していたのかもしれない・・・。哀しい景色でした。

さやさやとさやさやと秋桜

規雄

千恵さん・・・風に揺れる秋桜の様子が目に浮かびます。まさにさやさやと。。。

百合子さん・・・オノマトペが効いてますね。風にゆれる秋桜がありありと浮かびます。

新しき衣嬉しや地藏盆

けい子

ただしげさん・・・子供の頃、近くにあったお地藏さんの地藏盆の情景が思い出される

◎入院の妻に差し入れ茶巾寿し

天牛

孤舟選者・・・コロナ禍以降、面会はもとより差し入れもお断りの病院が多いようだが・・・。隆さん・・・妻への思いやりを句にする作者に敬服。

盛雄さん・・・茶巾寿しに愛妻家の思いが滲んでいる。

紀久男・・・万里子先生から「差し入れ」は監獄に収監されている人への言葉と指導を受けた。「お見舞い」としたら良いのでは。

二点

秋暑し聴いて浮き立つ遠囃子

紀久男

五郎太さん・・・わが町も来週は秋祭りです。提灯が吊るされました。

◎三日月や雲を切り裂き現れぬ

忠彦

孤舟選者・・・旧暦8月3日の夜は曇り空だったが、一瞬雲の切れ間から三日月が現れた。

五郎太さん・・・私もこうした景を見ました。

初秋や手帖に移す華頭窓

五郎太

亜也さん・・・見上げてスケッチする姿が秋空をバックにして目に浮かぶ。華頭窓は華頭窓？(五郎太さん・・・確かに華頭窓です。句評の亜也さんに了解を取り修正しました)

金秋や障害選手の功幾多

健介

とみ子さん・・・金秋やがパラリンピックの沢山の金メダルを連想させました。

◎憧れしドロン逝きたり星月夜

千恵

孤舟選者・・・あのニヒルで男くさい二枚目もとうとう星になってしまった。

◎しつとりと胡弓の調べ風の盆

ただしげ

孤舟選者・・・風の盆はしつとりと夜露に濡れる季節の始まりだ。

◎秋空や勝者拳を突き上ぐる

康敏

孤舟選者・・・どのスポーツでも勝者は空高く拳を振り上げて嬉しさを誇示するもの。

赤まんま整列下校の赤帽子

正己

隆さん・・・赤帽子と赤まんまとの取り合わせが上手い。

夜も更けて身の上話身に入みて

國護

天牛さん・・・年取って身の上話もだんだん身に入りますね。

耐えに耐えし日々は何処に今朝の秋

盛雄

龍平さん・・・同感です。熱しやすく冷めやすい我ながら

爽やかに砂つけて去る力士かな

盛雄

康敏さん・・・大相撲の力士は、負けて体は砂にまみれていても、爽やかに花道を下がって行く。
ゆたかさん・・・負けても颯爽と去る力士の姿が目には浮かびます

二点

広め屋の鉦より初秋溢れ出づ

孤舟

亜也さん・・・溢れ出るほどかは？なるも、チンドン屋と初秋の組合せには納得。

盛雄さん・・・商店街で宣伝するチンドン屋は懐かしい。鉦の音より初秋が溢れ出る。いいですな。

秋出水嘗て駅舎に伝言板

孤舟

五郎太さん・・・このところ多い洪水、詠みにくい題材を句にされました。

天牛さん・・・能登の方の小さな駅舎でしょうか、無人駅でしょうかね。

盂蘭盆会来し方行方駆け巡り

孤舟

百合子さん・・・亡くなった方々を偲びつつ、わが行く末にも想いを巡らす、よく分かります。

◎薄花活けて窓辺に風を招ぶ

とみ子

孤舟選者・・・虫の音を愛でたり月を鑑賞することは日本人独特の感性だ。

小鳥来るそのうれしさに餌を撒かむ

とみ子

紀久男・・・拙宅のベランダにも、山雀などたくさん野鳥が飛び来て餌をせがむし、名も知らない小鳥も来てアリアを唄っています。

秋芝居八十路の夢や勸進帳

ただしげ

とみ子さん・・・吉右衛門さんの夢は、叶いませんでしたが、幸四郎さんが熱演でしたね。

十六夜の歌舞伎の跳ねて鴨川へ

堂哉

亜也さん・・・芝居の余韻を愉しむ風情がいい。鴨川を渡れば祇園。

老女笑み我笑み返し秋の空

ゆたか

堂哉さん・・・日本人は見知らぬ同士で軽く挨拶を交わすことが下手ですね！睨まれることはありませんが。なんとも清々しい句です。

散歩路葉ずれの音も秋めきて

國護

百合子さん・・・心地よい秋の葉ずれの音、葉ずれの音にも季節を感じる感受性！

地獄絵の既視感秘めて台風来

びん

くにおさん・・・語順を変えて例えば「既視感の地獄絵のごと台風来」とでも。

執着を抱きしめ放つ秋空へ

百合子

とみ子さん・・・心が軽くなられたのでしょうか。

颱風来明日リモートとメールする

亜也

啓子さん・・・昨今はリモートでの職務遂行が出来るようになった。役職者は即座の判断が必要になる。さらりと詠われた中に、現代の世相と入り混じる心理と判断が垣間見えるようです。

一点

マドンナも遂に陥落秋の巴里

紀久男

盛雄さん・・・ロマンチックですな。きっと作者の遠い日の想い出の一句でしょう。落葉のパリで決まりました。

桐一葉乱高下する株価かな

くにお

ゆたかさん・・・ 株価を題材にされたことが斬新です。

秋夕焼あまたの瀬音出湯かな

ゆたか

※康敏さん・・・三段切れです。〈秋夕焼瀬音あまたの出湯かな〉と、すれば。

宇治金時自律神経目覚めさせ

正明

堂哉さん・・・面白い！長いこと食べていませんが、あのブルツとくる感触を思い出しました

※句中で：宇治金時は氷でしょうが、季語ではないので、無季語となりますね。

相聞歌奏づることく虫の声

昇

百合子さん・・・耳を澄ますと、そう聞こえるような・・・

以上



【次回青葉会予定】

☆十月二十四日（木）午後一時から

三軒茶屋・世田谷区施設「しゃれなあと」

（昭和信金三軒茶屋支店ビル）4階 部屋名：シリウス

○**出句**・**投句**締切日 十月二十日（日）午前中

メール、FAX、郵送で星田まで。

当季雑詠 句会ご参加者は五句 ご投句の方は二句を目処としてお出し下さい。



【青葉会報】

一、 今月のご報告となりました青葉会に出た九月の句は、多くに夏の季語が使われていると、句会で話題になったようです。ご投句の締め切りが早かったため、九月初旬に作句されたものかと思えます。九月は末になっても、まだまだ猛暑という言葉が毎日のように使われていた気候でした、季語が現代の自然や生活の形と幾許か乖離してきていることは、メディアでもこのところよく聞かれるようになりました。一方、その気候の中でも青葉会の皆さまの作句意欲は削がれず、ほぼいつもと変わらず、八十六句のご出句でした。

選句結果はご覧のとおり、十点句に孤舟選者、百合子さん、次いで八点句に天牛さん、五郎太さんと続きました。天牛さんはみなさまご承知のように御歳九十四歳。前回に続きの高得点です。ご健吟に頭が下がります。

また今回は久しぶりに「森の座」の青葉会、丸紅関係者の近詠を頂くことができました。おたのしみください。

二、孤舟選者近詠

月仰ぐ万葉人の心持ち

漁火に紛れ入りたる流れ星

小半の酒一丁の新豆腐

芋の葉の露のふたつの相寄らず

颱風の拗ねて暴れて迷走す

三、関係者近詠

額の花蓋まで舐めてヨーグルト 眞希子
 空豆や夫婦いま旬金婚へ 全
 シール貼る個人情報書唐辛子 全
 一泊の留守を頼むねアマリリス 弘子
 工場の際も律義な植田かな 全
 担がれていつかは渡りし夏大井川 全
 とつぷりの海霧に小島のうずくまる 全
 老鶯囀室津の君へ歌一首 全
 若沖へ日傘の潜る大手門 全
 しろがねの涼若沖の白孔雀 全

何の科黄金週間病床に 陽亮
 血脈の闇に怯えし五月かな 全
 白々と退院の日の明早し 全
 死線越え一生獲たり聖母月 全
 生還の身なればこそその更衣 全
 丁寧な妻のもの干す五月晴 全
 破れ傘写楽は謎のままがいい 全

清澄庭園

ずしんずしん名石を据ゑ苑みどり 延子
 咲き満ちて気だるしよ日の花菖蒲 全
 緑陰や風に味あり深く吸ふ 全
 富士を模す築山なだらか夏の蝶 全
 逝きて知る父の生ひ立ち花十薬 全
 よきことのみ息子は告ぐる額の花 全
 コンクリートを剥ぐや春の土漆黒 全

(福島延子氏…丸紅俳句部の大先輩)

令和六年十月吉日

(了)